

敦煌莫高窟第257窟沙弥守戒自殺因縁図に描かれた「遺影をともなう墓塔」

稲葉秀朗（早稲田大学）

本発表は、敦煌莫高窟第257窟（北魏・5世紀後半）の壁画「沙弥守戒自殺因縁図」に描かれた塔の図像を検討し、これを中国南北朝隋唐時代のいわゆる「遺影をともなう仏僧の墓塔」の系譜に位置付けると共に、その意義を論じるものである。

沙弥守戒自殺因縁はよく知られた因縁説話で、沙弥が仏戒を守るべく美しい娘の誘惑を振り払い自ら命を絶ったという、持戒の功德の讃嘆を主旨とする。本図はこの因縁説話の内容を窟内南壁に異時同図法によって描いたもので、横長の画面に排列された複数の場面が向かって左から右へと時系列順に展開していく。

このうち画面右端の最後の場面には、自殺した沙弥が火葬される様子に続いて塔が描かれている。先行研究においてこの塔は沙弥の供養塔（墓塔）と解されており、発表者も異論はない。ただし、本説話の典拠と思しき『賢愚経』巻5沙弥守戒自殺品には沙弥のために起塔がなされたとの記述がなく、図中の塔は本窟で独自に付加された図像であるらしい。

本図の塔内には頭光をともなう坐形の沙弥の姿が描かれているが、『賢愚経』に沙弥の遺体は火葬されたとあり、本図にも実際に沙弥の火葬の場面が含まれている。よって、塔内の沙弥の姿はその肖像をあらわしたものとみられる。

他方、文献史料には北魏を含む南北朝隋唐時代に、しばしば仏僧の墓塔に遺影としてその肖像が安置された事例を見出せる。発表者は中国におけるこうした営為が『四分律』の舍利弗と目連の墓塔に関する言説を根拠とし、中国の伝統的な宗廟のありかたとも結びついて受容・展開したと考えるが、本図の塔はこのような「遺影をともなう墓塔」が5世紀後半の北魏に実在した証左であると共に、その様相を造形化した最も早い作例に位置付けることができる。

さらに本図塔内の沙弥像は、図中の自殺直後の沙弥の亡骸や、火葬される沙弥の亡骸と同様の姿態によってあらわされている。このことから、本図中における塔内の沙弥像はその亡骸の様相の再現を企図したものであるとの想定が可能である。おそらく、沙弥の亡骸そのものが「仏戒を守るべく命を絶つ」という徳行の象徴とみなされ、沙弥を顕彰すべく建立された塔へ安置される肖像の最も相応しい姿とされたのだろう。併せて、沙弥像がともなう頭光もこうした徳行の得果と解せる。

なお、発表者は「遺影をともなう墓塔」の現存遺構である宝山靈泉寺（河南省安陽市）の隋唐時代の摩崖塔龕群（靈泉寺塔林）における僧尼の肖像や、墓塔の内部に安置された真身像としての高僧の亡骸に、「仏教者の得果としての臨終時ないし亡骸の様相を表象・顕示・顕彰しようとする意識」が看取できるのではないかと考えている。よって、やはり同様の意識が認められる本図の塔は、中国における仏僧の肖像のありかたと遺体の密接な関係性を示す早期の造形作例としても重要な意義を有するといえる。